

Title	修辞と行為 : 『マクベス』 試論
Author(s)	山津, さゆり
Citation	Osaka Literary Review. 28 P.116-P.127
Issue Date	1989-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25553">https://doi.org/10.18910/25553</a>
DOI	10.18910/25553
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 修 辞 と 行 為

— 『マクベス』 試論 —

山 津 さゆり

武将マクベスは悪業の限りを尽くし、ひたすら破局へと突き進んでいったのだが、言葉に魅入られるという性質があったことが、その原因の一つであったように思われる。この小論では、このことを考察してみたい。

この劇においてマクベスは、登場するや否や “So foul and fair a day I have not seen.” (I. iii. 38)<sup>1)</sup> というような曖昧な台詞を吐く。Edward Dowden の解釈に従うならば、この台詞は、魔女の “Fair is foul, and foul is fair.” (I. i. 11) という台詞に呼応しており、それはマクベスが魔女に遭遇する前に既に魔女の世界に精神的に引き込まれていることを暗示している、ということになっている。<sup>2)</sup> しかしながら、ここでは、マクベスのこの台詞を彼の言葉に魅入られる性質を示すものとして解釈してみたい。天候のことか、戦況のことかよくわからないとされているが、一つの修辭的表現として見ることは確かである。“foul” と “fair” の対立を乗り越えて、秩序を生み出すことも可能であろうが、マクベスは、それができずにこの修辭によって無秩序と混乱の世界に向かっていくことになるのである。

## I

マクベスは、彼の最初の台詞によって象徴されているように、修辭、あるいは言葉への執着が強いのだが、それはまた、魔女との最初の遭遇において唐突に与えられた予言に対する思い入れの激しさの中にも現われている。

第一幕第三場においてグラミスの領主であるマクベスは、バンクォーとともに凱旋していると、彼らを待ち受けていた魔女たちによって “Thane

of Glamis" (I. iii. 48), "Thane of Cawdor" (49), "that shalt be King hereafter" (50) と呼ばれる。しかし、これに対してマクベスは即座に答えることができないのである。この時のマクベスの様子は、バンクォーの "Good Sir, why do you start, and seem to fear / Things that do sound so fair?" (I. iii. 51-2) や "He seems rapt withal." (I. iii. 57) という言葉からわかる。マクベスは、魔女たちの予言に心を奪われ、冷静に対処することができないのである。彼は、言葉に対する反応が非常に強いために、自分の動揺ぶりを他人に知られるままにしているのである。Lily B. Campbell は、この場面に関して次のように述べている。

It is necessary to note carefully that this scene emphasizes from the beginning, therefore, the fear that appears in Macbeth just as his rash military courage appeared in the preceding scene.<sup>3)</sup>

Campbell は、マクベスの動揺の中に、恐怖心を読みとっているのだが、私は、マクベスが恐怖心のために心を奪われた状態になっていると解釈するよりも、言葉を強く受け取めすぎる性質のために、言葉からの衝撃力を理性的にかわすことができずに予言の内容を真向から受け取め、それに心を奪われてしまっているのだと解釈したい。

同じように魔女に出会い、予言を聞いても、バンクォーは、マクベスに比べると非常に冷静である。マクベスが実際にコーダの領主になるとの知らせを受けて、王位に対しても期待し始めると、バンクォーは、次のように忠告を与える。

Oftentimes, to win us to our harm,  
The instruments of Darkness tell us truths;  
Win us with honest trifles, to betray's  
In deepest consequence. (I. iii. 123-6)

彼は、魔女というものを冷静に分析し、彼らの言葉にのめり込むことはない。

マクベスの言葉に対する執着の強さは、次のような台詞にも見られる。

This supernatural soliciting  
 Cannot be ill ; cannot be good : ——  
 If ill, why hath it given me earnest of success,  
 Commencing in a truth? I am Thane of Cawdor :  
 If good, why do I yield to that suggestion  
 Whose horrid image doth unfix my hair,  
 And make my seated heart knock at my ribs,  
 Against the use of nature? Present fears  
 Are less than horrible imaginings.  
 My thought, whose murth' yet is but fantastical,  
 Shakes so my single state of man,  
 That function is smother'd in surmise,  
 And nothing is, but what is not. (I. iii. 130-42)

これは、マクベスの心の中で、王を殺そうという気持ちが強まった時の台詞である。D. A. Traversi は、この台詞には “the shaking to its foundations of what has been a harmonious personality” が表現されていると指摘しているが、<sup>4)</sup> 私には、その原因となる言葉に対する執着の強さが表わされているように思われる。この台詞の中には、魔女の予言に対する反応の激しさと、修辭に対するのめり込みの強さが認められる。

この台詞は、“If ill, …” や “If good, …” などの表現からもわかるように、一見、分析的であるかのように見えるが、全体としては、激しい動揺、あるいは興奮といった、收拾のつかない混乱した感覚を我々に感じさせる。“unfix my hair” とか “make my seated heart knock at my ribs” という表現には、動物的な激しい反応のようなものさえ感じられる。Traversi が “There is a tremendous sense of heightened animal feeling about the unfix'd hair and the hammering of the heart.”<sup>5)</sup> と言っているのは、非常に適切なものである。マクベスの様子を見て、バンクォーが “Look, how our partner's rapt.” (I. iii. 143) と言っていることからわかるように、マ

クベスはすっかり心を奪われているのである。魔女の予言を聞いて立ちすくんでいるマクベスをバンクォーは“*He seems rapt withal.*” (I. iii. 57) と言ったが、ここでもまた彼は、マクベスの様子を“*rapt*”だと言うのである。このことから、マクベスがここでも、魔女の予言に対して、いかに体ごとと激しく反応しているかということがわかる。この“*rapt*”という言葉は、マクベスの言葉に対する異様なまでののめり込みを表わす、見逃してはならない言葉である。そしてこれほどまでに大きな内的エネルギーも外へ向かう時、善の方向に向かわずに、ただ渦巻きながら、混沌とした世界に突進していただけなのである。

また、先に引用した長い独白の中には“*Nothing is, but what is not.*”というわかりにくい表現があり、それに関して G. Wilson Knight が“*Reality and unreality change places.*”<sup>6)</sup>と述べているように、確かにマクベスにとって、“*nothing*”非現実である、王殺しという恐るべき妄想が現実のものになるのだということを読みとることができる。しかし、それは決して否めないけれども、マクベスがそのような韜晦的表現を用いていること自体にまず着目することが重要であるように思われる。彼はそのような表現によって自分自身をも不明瞭にしているということ；つまり、それによってますます混乱状態に陥っているということが言えるのである。彼は言葉、あるいは修辞にのめり込みすぎることによって、かえって冷静な判断を欠いて悪へ向かうことになるのである。

このようにマクベスは、修辞への強い執着あるいは、言葉に対する激しい反応によって王殺しという悪に向かうベクトルをしっかりと定めてしまうことになるのである。

## II

マクベスは、こうしていよいよ王の暗殺に向かうのであるが、すんなりとやってのけるわけではない。彼は王を殺そうと決意した後もためらい、殺害後には反省をする。それでは次に、彼のためらいや反省において、い

かに修辞への執着が見られるかということを考察してみたい。

第一幕第七場の冒頭に、二十八行にわたるマクベスの独白がある。そこで彼は、王殺しに心が向いているものの、悪業の報いを考えて、王殺しを執行することをためらっているのであるが、この時の彼の修辞への執着は尋常のものではない。この独白に関して、John Baxter が、“This speech, of course, has commanded an enormous volume of commentary, much of it devoted to interpreting its extraordinary imagery.”<sup>7)</sup>と述べているように、この台詞におけるイメジャリーの異常さは、それほど注目すべきものなのではあるが、私はマクベスの修辞への傾倒は、そのような異常なイメジャリーだけに限られるものではないことにも注目したい。

“If it were done, when 'tis done, . . .” (I. vii. 1) という台詞を見てみると、二つの“done”の意味に違いがあることがわかる。ペンギン版の注を参照すると“if the doing of the deed were the end of it”<sup>8)</sup>と言い替えるように、最初の“done”は、「終わった」という意味であり、後の“done”は、「なされた」という意味なのである。このようにマクベスは非常に簡単な表現の中でさえ、“done”を二つの意味で用いるというように、修辞に凝っているのである。

マクベスが異常なイメジャリーを用いている箇所に関しては、特に“Pity, like a naked new-born babe, / Striding the blast” (I. vii. 21-2) に注目してみたい。D. A. Traversi は、このせりふについて、“The “new-born babe” becomes, in his distraught imagination, an avenging power “striding the blast.”<sup>9)</sup>と述べている。Traversi は、この台詞を述べた時のマクベスの精神状態が、狂気のような状態であったと考えているようであるが、私は、ここにはマクベスの内的エネルギーの強烈さが認められると思う。“a naked new-born babe”は、“pity”の比喩なのだが、それが“blast”という強いイメージをもつものの力をしのいで、それにまたがるという、普通では考えられないイメジャリーに、マクベス自身の強烈なエネルギーが反映されていると言ってもよいように思われる。

このように、暗殺をためらうマクベスの独白において、異常なイメージリーにはもちろんのこと、簡単な表現にまで、彼の尋常ならざる修辭へのめり込みが見出せるのである。ためらいという、本来弱い性質のものに、修辭への激しい傾倒のもつ強烈なエネルギーが渦巻いているのである。そして、この内在するエネルギーが、最後まで悪業をし続けるエネルギーとなっていくのである。

このようなエネルギーは、王殺害後の反省と思われる台詞にも見られる。マクベスがダンカン王を暗殺した直後、血に染まった両手を見つめながら、

Will all great Neptune's ocean wash this blood  
Clean from my hand? No, this my hand will rather  
The multitudinous seas incarnadine,  
Making the green one red. (II. ii. 59-62)

と煩悶して言う台詞を挙げることができる。この台詞の後半の部分に関して、Harold C. Goddard は、マクベス夫人の台詞を引合いに出しながら、次のように指摘している。

When Lady Macbeth, in the end, attains the same insight that is Macbeth's instantly—"all the perfumes of Arabia will not sweeten this little hand"—she does not pass, it is to be noted, to the second part of the generalization. It is this defect in imagination that makes her, if a more pathetic, a less tragic figure than her husband.<sup>10)</sup>

Goddard は、マクベス夫人には、マクベスと比較すると、自分の罪が人間を含めて他のものすべてを汚してしまうのではないかという深い反省がないと言っているのである。私はこの指摘は正しいと思うが、マクベスの台詞の後半の部分に見られる修辭のスケールの大きさに着目してみたい。海全体が真赤になるというイメージだけでも強烈なのだが、その強烈さは、そこに使われている語によって、さらに一層強いものとなっている。“multitudinous” や “incarnadine” だけでは、場違いであるとか学術的であるという印象の方が強くなるかもしれないが、“green” や “red” といっ

た平易な語を対照させることによって、力強いものとなっている。同時に“green”や“red”という言葉も前の二つの多音節の言葉と対照されることによって、力強いものになっている。

ここでも、修辭への執着が見られ、ひいては行動の際のエネルギーが感じられる。Goddardは、先に挙げた引用の最後で、マクベス夫人は、マクベスよりも“pathetic”であるとしても、マクベスほど“tragic”ではないと述べているが、これはマクベス夫人にはマクベスほどのエネルギーがなかったということに通じるであろう。

暗殺前のマクベスのためらいや、暗殺後の彼の反省と見られる台詞において、修辭へののめり込みと、さらに進んで、行動へ駆り立てるエネルギーが認められることを考察してきた。ここでもう一つ、マクベスのためらい、反省を表わす台詞と一緒に考察しておくべき、述懐を表わす台詞、つまり、第五幕第五場における有名な述懐の台詞について論じてみたい。

マクベスは、劇もクライマックスとなり、マクベス夫人の死を知らされ、人生というものに対する述懐を独白する。

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,  
 Creeps in this petty pace from day to day,  
 To the last syllable of recorded time;  
 And all our yesterdays have lighted fools  
 The way to dusty death. Out, out, brief candle!  
 Life's but a walking shadow; a poor player,  
 That struts and frets his hour upon the stage,  
 And then is heard no more: it is a tale  
 Told by an idiot, full of sound and fury,  
 Signifying nothing. (V. v. 19-28)

この台詞に関して、G. Wilson Knightは、次のように述べている。

He finds peace in the profundities of his own nihilistic death-experience: death and 'nothing' are realities: life has no meaning.<sup>11)</sup>



確かに、マクベスは人生を一切無に帰しているのである。このような人生観は、あまり感心できないものだが、しばしば人生に絶望した時に抱く人生観の表現としては非常にすぐれたものである。この独白にも、それほど卓越した表現を生み出す、マクベスの修辞への執着が感じられる。

それでは、この独白におけるマクベスのレトリックを詳しく考察してみたい。既に論じた“Pity, like a naked new-born babe, / Striding the blast”(I. vii. 21-2)のような異常なイメージアリーに比べると、“To-morrow, …”の台詞には、全体としてはそのような誰にも思い付かないような尋常でないイメージアリーあるいは比喩はない。人生を舞台に、人間を役者にたとえたりするのは、誰でも思い付く比喩である。また、使われている語を見ても、全体的には非常に簡潔で平易なものである。しかし、そのようなありふれた比喩や、簡潔で平易な語にも非常な工夫がなされているので、人生に対する虚無的態度の力強い表現となっている。これは修辞に対して異常なまでに執着するマクベスだからこそできることなのである。

その工夫のうちの二、三の例を考えてみよう。“Out, out, brief candle!”という台詞を見ると、“out”という語が、非常に簡潔であるにもかかわらず、強烈な衝撃波で我々の心を打つ。そして、“out”という簡潔な語と、「短い」という意味をもち、さらに言葉自体簡潔な“brief”という語の呼応が、この一行の台詞の表わす絶望感をなお一層強めているのである。また、“struts and frets”という簡潔でしかも印象的な言葉も、使えそうで使えない言葉である。

このように全体的に簡潔さの際立った独白にも、“signifying”という多音節の凝った語が、最後に対照的に使われている。意味を満足させるだけでよいならば、“meaning”を代用してもよかったであろうが、“signifying”という力のこもった、ずっしりとした重みのある語を用いることによって、そのすぐ後の“nothing”を強調しているのである。“signifying”と言って我々に何か有意義なものを大いに期待させておいて、“nothing”と言い、その大きなずれによって、“nothing”を印象づけている。

マクベスが人生を虚無的に述懐するこの独白にも、上で述べたように、彼の修辞に対する執着が見られ、その際のエネルギーは強烈なものである。マクベスは一見、肩を落とし、弱々しく人生を述懐しているが、修辞に対する執着を通して、内在するエネルギーを我々に感じさせているように思われる。

“To-morrow,…”の台詞は、マクベスがマクベス夫人の死の知らせを受けた直後に吐かれたものであり、多くの批評家は、マクベスが夫人の死を深刻に受け取めていないと考えているようであるが、私は必ずしもそうは思わない。第五幕第三場においても、沈んで人生を述懐している台詞がある。

I have liv'd long enough: my way of life  
Is fall'n into the sere, the yellow leaf;  
And that which should accompany old age,  
As honour, love, obedience, troops of friends,  
I must not look to have. (V. iii. 22-6)

マクベスは、自分の味方が少なくなる上に、イングランド兵が押し寄せて来たという知らせを聞いて、かなり動揺し、うち沈んで自分の人生を省みているのである。この台詞と“To-morrow,…”の台詞を比べて見る時、同じように意気消沈して人生を述懐していても、後者の方が前者よりはるかに深みがあるということは明らかであろう。Wilber Sanders は、前者に関して、“One may feel that the Macbeth of Act V has finally ‘grown up’.”<sup>12)</sup>と述べ、マクベスに成長と言えるようなものを感じとっている。しかし、私には、たとえマクベスに成長があったとしても、その台詞はマクベスの最終的な成長を感じさせるほど、深みのあるものではないように思われる。そこから、“To-morrow,…”の台詞に感じられるようなエネルギーは感じられない。そこにあるのは、ただの平凡な表現であり、疲労感のようなものを感じさせるだけである。

“To-morrow,…”の台詞に、それをはるかに越える深みやエネルギー

が感じられるのは、マクベスが夫人の死を非常に深刻に受け取めているからこそなのである。多くの批評家たちがマクベスが夫人の死を深刻に受け取めていないと考えたのもっともなことで、確かに、夫人の死の知らせを受ける前にもマクベスは、“Direness, familiar to my slaughterous thoughts / Cannot once start me.” (V. v. 14-5) と言っている。しかし、このように口では恐怖に対して無感覚になった自己を冷静に語っているようであっても、夫人の死に対してはやはり、激しい感情の高ぶりを隠しきれない。冷静な台詞の後だけに、“To-morrow,…”の台詞の裏に秘められた感情の高ぶりを見抜くのは容易ではないが、この台詞に関して既に見たような修辞への執着を通して、その激しい感情の高ぶりが、強烈なエネルギーとなって、我々に伝わってくるのである。夫人の死に対して淡々としているように見えるが、この台詞に内在するエネルギーを認めることによって、夫人の死に対するマクベスの精神的打撃の大きさをも察知することができるのである。

私はここまで、マクベスのためらいや、反省、述懐の台詞に見られる修辞への執着を見、そしてその中に、行動へのエネルギーを見てきた。これは悪人としてのエネルギーであったとはいえ、そのエネルギーの大きさは認めざるを得ない。

### III

このようにマクベスは、修辞に対して激しくのめり込んだのだが、あまりに執着しすぎているために、あるいは、執着しているわりには、他の者の比喩が見抜けないう事態が生じた。第四幕第一場で魔女たちの呼び出した幻影たちが与えた二つの予言、つまり、“None of woman born / Shall harm Macbeth.” (IV. i. 80-1) と “Macbeth shall never vanquish’d be, until / Great Birnam wood to high Dunsinane hill / Shall come against him.” (IV. i. 92-4) に対してマクベスは全く不審を抱くことなく、それどころか手離しに自分の安泰を喜ぶ。彼は、前者の予言については、

“woman born” でない者などいるはずがないと速断してしまうのである。彼にとって，“woman born” の者とはすべての人間であって、帝王切開で生まれる者にまで思い至らないのである。そして、後者の予言については、森が動くなどあり得ないから大丈夫だと信じ込むだけで、なぜわざわざ「バーナムの森が攻めて来るまでは」と制限されているのかと疑うこともなく、「森が攻めてくる」という表現が戦いにおけるトリックのメタファーであるとは夢にも思っていないのである。

あれほどレトリックに執着し、メタファーに満ちた台詞を吐くマクベスが、自分自身に与えられた予言のメタファーを見抜くことができず、それをただ現実を述べた普通の表現として解釈してしまっているのである。James C. Bulman は、“His insistence on the validity of the prophecies may be more rhetorical than substantial, a desperate attempt to delude himself as well as his followers.”<sup>13)</sup>と指摘し、マクベスが予言を信じているのは見せかけだとしているが、私は、マクベスは予言の比喩を見破れずに、“substantial” に予言を信じているのだと思う。

マクベスは、こうして与えられた予言の比喩を見抜くことができないまま予言を信じ続け、それに土壇場で裏切られ、自滅する。彼の、行為へのエネルギーを内在させる修辭への執着が致命的打撃をもたらして行為を終結させるという皮肉な結果となっている。

修辭、あるいは言葉に対する異常なまでの執着は、マクベスを悪の方向に向かわせ、また、それに内在する行動へのエネルギーによって、彼に悪人なりの奥深さを与えている。彼は、ためらい、反省し、述懐しながら、また、そこに悪業を貫くエネルギーを秘め、己れの修辭による失敗が招くことになる最期に至るまで、武人として生き抜くのである。

I pull in resolution.

... Arm, arm, and out! ...

I'gin to be aweary of the sun,

... Blow, wind! come, wrack!

At least we'll die with harness on our back. (V. v. 42-52)

Harold C. Goddard が言っているように、マクベスのこの台詞には、“oscillations”が見られるが、<sup>14)</sup> 動揺があっても、最期まで武人として行動を貫こうとするエネルギーがここにも見られる。

## 注

- 1) Kenneth Muir (ed.), *The Arden Shakespeare: Macbeth* (London and New York: Methuen & Co. Ltd., 1962/84), p. 14.  
以下『マクベス』からの引用はすべてこの版による。
- 2) Edward Dowden, *Shakspeare: A Critical Study of His Mind and Art* (London: Routledge & Kegan Paul LTD, 1875/1967), p. 249.
- 3) Lily B. Campbell, *Shakespeare's Tragic Heroes* (Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1973), p. 214.
- 4) D. A. Traversi, *An Approach to Shakespeare*, Vol. II. (New York: Anchor Books, 1969), pp. 117-8.
- 5) *Ibid.*, p. 118.
- 6) G. Wilson Knight, *The Wheel of Fire* (New York: Meridian Books, INC., 1957), p. 153.
- 7) John Baxter, *Shakespeare's poetic styles* (London: Routledge & Kegan Paul, 1980), p. 208.
- 8) G. K. Hunter, “Commentary” on *The New Penguin Shakespeare: Macbeth* (Harmondsworth: Penguin Books, 1967/87), p. 148.
- 9) Traversi, p. 124.
- 10) Harold C. Goddard, *The Meaning of Shakespeare*, Vol. II. (Chicago & London: Phoenix Books, 1960/73), p. 117.
- 11) G. Wilson Knight, *The Imperial Theme* (London: Methuen & Co LTD, 1951/63), p. 152.
- 12) Wilber Sanders and Howard Jacobson, *Shakespeare's Magnanimity* (London: Chatto & Windus, 1978), p. 78.
- 13) James C. Bulman, *The Heroic Idiom of Shakespearean Tragedy* (London and Toronto: Associated University Presses, 1985), p. 187.
- 14) Goddard, p. 130.